

第226回 令和8年5月12日（火）

「夢か現実か」

有名な哲学者にデカルトという人がいます。「疑心暗鬼」という言葉がありますが、彼は「疑う」ということに関しては右に出るものがいませんでした。

「 $1+1$ は2である」というのは動かしようのない心理のように思えますが、デカルトは「方法的懐疑」によって「この世に確実なものは一つもない」と考えました。考えてみれば私たちは夜夢を見て、目が覚めて現実に戻るわけですが、いまが現実であることが確実かと言われるとどうでしょうか。

「頬をつねると痛いから」と言ったところで、私たちが夜に見ている夢との違いを現すだけで、現実が夢ではないという証明にはなりません。「現実が夢の一つだったらそれだけ長くみられるはずがない」と思うかもしれませんが、夢の中の時間というのは不安定です。「長い」という感覚は私たちの主観に過ぎません。

デカルトがたどり着いた結論が「われ思うゆえにわれあり」でした。いま考えている自分の存在を否定することだけはできないというものです。逆に言えばそれ以外は確実なものなど何もないということです。

夢は脳が記憶を整理するための機能の一つであると言われています。見たい夢が自由に見られたら良いのですが、時に悪夢もあります。脳が記憶を整理して、必要のない記憶を忘却するために睡眠は大切です。

オカルトめいた学説ですが、人間は行動するとき、例えば歩くことを脳に命令しているわけではなくて、一瞬前にどこからか脳に命令があり、それを実行しているという説があります。それが本当だとすると人間の行動はすでに決まっていて、脳というコンピューターが人間を動かしている、私たちはそれを自分の意思であるかのように錯覚しているに過ぎないということです。

それが本当ならまるで夢の中と同じですね。私たちが現実だと思っている世界が夢の一つの形態かもしれないわけです。そうではないと思いますが、証明できるかと言えば難しいかもしれません。

哲学は奥が深く、哲学者の中には最後は精神を病んでしまう人もいました。そこまで考えすぎる必要はありませんが、人生を考えるうえで興味深い学問であることは確かです。みなさんも哲学に触れて、自分の視座を広げてみてはいかがでしょうか。

